

L : T野、A井、A原、H口

長らく会の山行から離れていたA井さんからT野さんに一通のメールが送られた。内容は、ようやく山に行ける余裕が出来たので山スキーの道具を買い替えたとの事。ついてはどこかに行きませんか？と。A井さんは若手のホープとして知られているが、実に13年振りの山スキーになるらしい。そんな嬉しい復帰の話を小耳にはさみ、ぜひ僕もその現場に立ち合わせてもらいたいと手を挙げた。

日にちは3月7日土曜日に決まった。しかし近づくにつれその日はすっぱり低気圧に覆われる予報となってしまった。日にちは動かせないなので、日帰りの林間コースとしてT野さんが選んだのは、裏磐梯・グランデコススキーリゾートからその西側にあるボス大巔、ボス吾妻という小ピークを巡るコース。最悪雨にはならない事を祈って。

佐野でA井さんと合流して猪苗代に向かって走る。今晚は道の駅でビバークだが「最近安宿を探して泊まる事が多いので、久々にこんな所で寝るの緊張するな」とT野さんが苦笑いしている。もちろんA井さんにとっては超久し振りだが、むしろワクワクしているのかもしれない。

6時起きで出発。朝食を取ってグランデコには7時過ぎに到着した。直近の予報でグランデコは晴れと出ていたが雪である。取り付きまでリフトを3本乗り継ぐのだがリフト券売場は8時から、リフトが動き出すのは8時半からなのでしばし待機である。ちなみにリフトは1回券900円。リフトだけに上がるばかり。

1本目のリフトに乗り込むと横風が強く吹き付けていた。リフトにフードが付いているのはありがたいが寒くて指先がツーンと痛い。

3本目のリフトを降りると周りはずっと白かった。シールを取り付けていると「A井さん、道具は新しくなったけど、そのウェアは昔のままだな」とT野さんにかかわれA井さんが照れていた。

9:20に歩き出す。雪面は力を加えるとミシッと軋む。

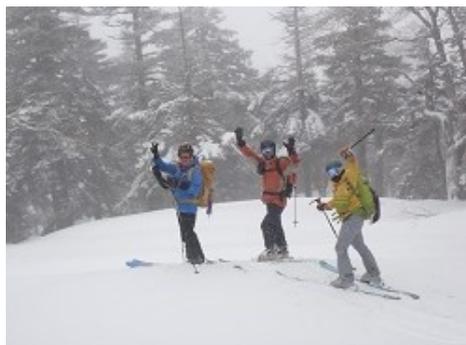
「いやな雪だねえ。おそらく東斜面はいい雪だと思うんだけど」とT野さんが言う。

谷筋を越えるため1,870mまで上った所から西に向かって横移動を始めた。この時トップを歩いていたが、モナカ雪の斜面のトラバースは一步一步しっかり踏み込まないと不安だ。風は向かい風で顔に細かい雪の粒が当たって来る。

西大巔からの登山道に出る手前まで行った所で

「ここら辺から下りて行けばいいんじゃないかな」とT野さんが板を外した。ここから南西に550mほど下った百貫清水まで下って行くのだ。

風と細かい雪でうすら白くなっている中でシールをはがす。サングラスもゴーグルに替えた。T野さんが滑り出し、次はA井さん。トップを上げ柔らかい動きで滑って行く。スキーの名手とは聞いていたが聞きしに勝る滑りだ。



1,500m 辺りまで下るとバタッ、バタッと次々にみんな倒れ始める。モナカ度がだんだん強くなってきたのだ。板の後ろが引っ掛かったり、山足を取られたり。ヘタするとあやうく木にぶつかりそうになる。倒れて起き上がる度に体力が消耗していくのを感じる。

百貫清水の近く、1,280m まで下った所で集まった。ここから 150m 上った所がボス大巔になるが

「今日は雪がこんなだし、もう上まで行かなくていいか」とT野さんが言ってきた。誰も異存ない。

「モナカちゃんとガリガリくんで、今日は滑ってるよりシールで歩いてる方が楽しいもんな。」

せっかくだからせめて百貫清水の所までは行ってみようという事になった。シールを取り付けようとしたらシールの糊面に霜が付着して接着力が落ちている。A井さんはテープ留めし、僕はスキーバンドで固定した。

YAMAP で位置確認しながら進むと看板が見つかり 12:15、雪の中にぽっかり口を開けた百貫清水に到着した。百貫清水は冬でも雪に埋まらない泉である。名水百選に選ばれており、看板によれば『その昔、百貫の値以上に価値があると称えられた泉』だそうである。どこぞのピークまで行かなくても十分目的達成に値するランドマークではないか。

「雪が良ければここまでスキーでスイスイスイ〜っと来れちゃうんだけどね」とT野さんが言うがぜひそんな風に来てみたかった。



帰路、北東に向かって上り返していく。下って来る時はそれどころじゃなかったが、周りはみごとなブナの林だ。中には立派に太いものもある。百貫清水から 200m 上がり、そこからスキー場に向けて南東に滑って行く。雪はそれほど悪くない。T野さんが言ったように東側はマシなのだろう。

遠くに人が滑って行く姿が見え、第三リフトの乗り場付近からスキー場のエリアに入った。修行を終え、みんなホッとしたように脱力して滑って行く。

14時、グランデコのゲレンデ入口に到着。

「A井さん、せっかく久しぶりのスキーだったけど、こんなに雪が悪いのなんて十年に一度の悪さなんで、これに懲りないでまた行こうよ」とT野さんが言うのをA井さんはニヤニヤと受けていた。

この後、温泉に入って、喜多方ラーメンを食べて裏磐梯らしい仕上げをした。

翌日、A井さんからメンバーにメールが入った。厳しい条件だったけれど、それらがまたかつてを思い出させる楽しい出来事であったようだ。A井さんの復帰、万歳！お帰りなさい。

(H口 記)